

列車

太宰治

青空文庫

一九二五年に梅鉢工場という所でこしらえられたC五一型のその機関車は、同じ工場と同じころ製作された三等客車三輛りょうと、食堂車、二等客車、二等寝台車、各々一輛ずつと、ほかに郵便やら荷物やらの貨車三輛と、都合九つの箱に、ざつと二百名からの旅客と十万を越える通信とそれにまつわる幾多の胸痛む物語とを載せ、雨の日も風の日も午後の二時半になれば、ピストンをはためかせて上野から青森へ向けて走った。時に依つて万歳の叫喚で送られたり、手巾ハンカチで名残を惜まれたり、または嗚咽おえつでもつて不吉な饑はなむけを受けるのである。列車番号は一〇三。

番号からして気持が悪い。一九二五年からいままで、八年も経

っているが、その間にこの列車は幾万人の愛情を引き裂いたことか。げんに私が此の列車のため、ひどくからい目に遭わされた。

つい昨年しおたの冬、汐田しおたがテツさんを国元へ送りかえした時のことである。

テツさんと汐田とは同じ郷里で幼いときからの仲らしく、私も汐田と高等学校の寮でひとつ室に寝起していた関係から、折にふれてはこの恋愛を物語られた。テツさんは貧しい育ちの娘であるから、少々内福な汐田の家では二人の結婚は不承知であつて、それゆえ汐田は彼の父親と、いくたびとなく烈はげしい口論をした。その最初の喧嘩けんかの際、汐田は卒倒せん許ばかりに興奮して、しまいに、滴たらたら々と鼻血を流したのであるが、そのような愚直な挿話そうわさえ、

年若い私の胸を異様に轟かせたものだ。

そのうちに私も汐田も高等学校を出て、一緒に東京の大学へはいった。それから三年経っている。この期間は、私にとっては困難なとしつきであつたけれども、汐田にはそんなことがなかつたらしく、毎日をのうのうと暮していたようであつた。私の最初間借していた家が大学のじき近くにあつたので、汐田は入学当時こそほんの二三回そこへ寄つて呉れたが、環境も思想も音を立てつつ離叛して行つて行つて二人には、以前のようなわけへだて無い友情はとても望めなかつたのだ。私のひがみからかも知れないが、あのととき若し、テツさんの上京さえなかつたなら、汐田はきつと永久に私から遠のいて了うつもりであつたらしい。

汐田は私とむつまじい交渉を絶つてから三年目の冬に、突然、私の郊外の家を訪れてテツさんの上京を告げたのである。テツさんは汐田の卒業を待ち兼ねて、ひとりで東京へ逃げて来たのであった。

そのころには私も或る無学な田舎女と結婚していたし、いまさら汐田のその出来事に胸をときめかすような、そんな若やいだ気持を次第にうしないかけていた矢先であつたから、汐田のだしぬけな来訪に幾分まごつきはしたが、彼のその訪問の底意を見抜く事を忘れなかつた。そんな一少女の出奔を知己の間に言いふらすことが、彼の自尊心をどんなに満足させたか。私は彼の有頂天を不愉快に感じ、彼のテツさんに対する眞実を疑いさえした。私の

この疑惑は無残にも的中していた。彼は私にひとしきり、狂喜し感激して見せた揚句、眉間みけんに皺しわを寄せて、どうしたらいいだろう？ という相談を小声で持ちかけたではないか。私は最早、そのようなひまな遊戯には同情が持てなかつたので、君も伶俐りこうになつたね、君がテツさんに昔程の愛を感じられなかつたなら、別れるほかはあるまい、と汐田の思うつばを直ちよくせつ截せつに言つてやった。汐田は、口角にまざまざと微笑をふくめて、しかし、と考え込んだ。

それから四五日して私は汐田から速達郵便を受け取つた。その葉書には、友人たちの忠告もあり、お互の将来のためにテツさんをくにへ返す、あすの二時半の汽車で帰る筈はずだ、という意味のこ

とがらが簡単に認め^{したた}られていた。私は頼まれもせぬのに、テツさんを見送つてやろうと即座に覚悟をきめた。私にはそんな軽はずみなことをしがちな悲しい習性があったのである。

あくる日は朝から雨が降っていた。

私はしづる妻をせきたてて、一緒に上野駅へ出掛けた。

一〇三号のその列車は、つめたい雨の中で黒煙を吐きつつ発車の時刻を待っていた。私たちは列車の窓をひとつひとつたんねんに捜して歩いた。テツさんは機関車のすぐ隣の三等客車に席をとっていた。三四年まえに汐田の紹介でいちど逢ったことがあるけれども、あれから見ると顔の色がたいへん白くなって、頤^{あご}のあたりもふつくりとふとつていたのであった。テツさんも私の顔を忘

れずにいて呉れて、私が声をかけたら、すぐ列車の窓から半身乗り出して嬉しそうに挨拶をかえたのである。私はテツさんに妻を引き合せてやった。私がわざわざ妻を連れて来たのは妻も亦テツさんと同じように貧しい育ちの女であるから、テツさんを慰めるにしても、私などよりなにかきつと適切な態度や言葉をもつてするにちがいないと独断したからであつた。しかし、私はままと裏切られたのである。テツさんと妻は、お互に貴婦人のようなお辞儀を無言で取り交したただけであつた。私は、まのわるい思いがして、なんの符号であろうか客車の横腹へしろいペンキで小さく書かれてあるスハフ 134273 という文字のあたりをこつこつと洋傘の柄でたたいたものだ。

テツさんと妻は天候について二言三言話し合った。その対話がすんで了うと、みんなは愈々いよいよ手持ぶさたになった。テツさんは、窓縁につつましく並べて置いた丸い十本の指を矢鱈やたらにかがめたり伸ばしたりしながら、ひとつ処をじつと見つめているのであった。私はそのような光景を見て居れなかつたので、テツさんのところからこつそり離れて、長いプラットフォームをさまよい歩いたのである。列車の下から吐き出されるスチームが冷い湯気となって、白々と私の足もとを這はい廻まわっていた。

私は電気時計のあたりで立ちどまって、列車を眺めた。列車は雨ですつかり濡れて、黝あおくろく光っていた。

三輛目の三等客車の窓から、思い切り首をさしのべて五、六人

の見送りの人たちへおろおろ会釈している蒼黒あおぐろい顔がひとつ見えた。その頃日本では他の或る国と戦争を始めていたが、それに動員された兵士であろう。私は見るべからざるものを見たような気がして、窒息しそうに胸苦しくなった。

数年まえ私は或る思想団体にいささかでも関係を持ったことがあつて、のちまもなく見映えのせぬ申しわけを立ててその団体と別れてしまったのであるが、いま、こうして兵士を眼の前に凝視し、また、恥かしめられ汚されて帰郷して行くテツさんを眺めては、私のあんな申しわけが立つ立たぬどころでないと思つたのである。

私は頭の上の電気時計を振り仰いだ。発車まで未だ三分ほど間

があつた。私は堪らない気持がした。誰だつてそうであろうが、見送人にとって、この発車前の三分間ぐらい閉口なものはない。言うべきことは、すっかり言いつくしてあるし、ただむなしく顔を見合せているばかりなのである。まして今のこの場合、私はその言うべき言葉さえなにひとつ考えつかずにいるではないか。妻がもつと才能のある女であつたならば、私はまだしも気楽なのであるが、見よ、妻はテツさんの傍にいながら、むくれたような顔をして先刻から黙つて立ちつくしているのである。私は思い切つてテツさんの窓の方へあるいて行つた。

発車が間近いのである。列車は四百五十哩マイルの行程を前にしていきりたち、プラットホームは色めき渡つた。私の胸には、もはや

他人の身の上まで思いやるような、そんな余裕がなかったのも、テツさんを慰めるのに「災難」という無責任な言葉を使ったりした。しかし、のろまな妻は列車の横壁にかかってある青い鉄札の、水玉が一杯ついた文字を此頃習いたてのたどたどしい智識でもって、FOR A-O-MO-RI とひくく読んでいたのである。

青空文庫情報

底本：「晩年」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年12月10日発行

1985（昭和60）年10月5日70刷改版

1999（平成11）年6月25日105刷

初出：「サンデー東奥」

1933（昭和8）年2月

※「サンデー東奥」には、懸賞小説として、太宰治名で発表されたはじめての作品。

入力：村田拓哉

校正：青木直子

1999年12月17日公開

2013年4月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

列車

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>